

1T-08 複合動詞の構成と翻訳規則

宮本 健司 安井 剛 池原 悟 村上 仁一

鳥取大学工学部知能情報工学科

1 はじめに

機械翻訳における問題点の一つに複合動詞の翻訳処理がある。これに対して、最近、翻訳辞書の網羅性を向上させるため、複合動詞とそれに対する日英対訳用例文の収集が進められている¹⁾。しかし、すべての複合動詞をあらかじめ登録するのは困難であり、この手法では未知の複合動詞の出現に対応できない。また、言語学的には複合動詞を構成要素で分類し、タイプ別に分けている²⁾が、日本語のみ考慮しており、その分類から訳語を決定し機械翻訳に利用するのは難しい。そこで、本稿では組み合わせ可能な動詞の種類に着目して複合動詞の構成規則を作成すると共に、それに基づく翻訳の方法を検討する。

2 複合動詞の形態

複合動詞とは二つ以上の単語から成る複合語であり、複合語を構成する単語全てか、または後部の単語が動詞であって全体として動詞の役割を果たすものである。

◎複合動詞を含む文章の例を以下に示す。

彼は急に走り出す。

空港から飛行機が飛んで行く。

私は街中を一日中ぶらついた。

以上より、本論文では、複合動詞の形態は動詞+動詞、名詞+動詞、副詞/擬態語+動詞となり、さらに動詞+動詞の形態については、「～て～」の形のもを動詞テ型+動詞、それ以外を動詞原型+動詞とした。

次に、複合動詞の形態の頻度を表1に示す(頻度は機能試験文集³⁾の割合)。

(1), (2)は意味的に分離できるものが多く構成要素の分類が可能であり、頻度においても複合動詞の大部分を占めているので本研究における分類の対象とする。しかし、(3), (4)に当てはまる複合動詞は意味的に分離できないものが多く、それぞれの訳語を個々にあら

かじめ辞書に登録する手法をとる必要がある。また(1)や(2)に比べ(3)や(4)は頻度においてかなり少ないので(3), (4)は本稿においての分類の対象としては取り扱わない。

表1:複合動詞の形態

	形態	例	頻度
(1)	動詞テ型+動詞	持っていく	72%
(2)	動詞原型+動詞	持ち上げる	26%
(3)	名詞+動詞	腰かける	1%
(4)	副詞/擬態語+動詞	べとつく	1%

3 分類の方法

複合動詞の翻訳形式を構成要素から決定する分類表を作成する。分類するための標本として機能試験文集より抽出した675個の複合動詞を使用する。その内訳は、動詞テ型+動詞が498個、動詞原型+動詞が177個である。ここで、標本として使用する複合動詞を構成する単語は全て動詞であるので、これより前方の単語を前方動詞、後方の単語を後方動詞と呼ぶ。

まず、標本に付与されている英訳を参照し意味的に分離できない複合動詞を標本より除く。次に、残りの標本のうち翻訳形式に規則性があると思われる複合動詞に対して以下のように構成要素を分類する。

(1) 後方動詞の分類

後方動詞は機能動詞が多く種類も少ない。そこで、以下の2点に分類する。

1. 表記で分類 — 「はじめる」、「いく」、「ある」等で分類
2. 動詞の持つ意味で分類 — 「動作/現象の継続」、「現象/作用/状態の変化」、「空間移動」等で分類

(2) 前方動詞の分類

分類した後方動詞に対して接続される前方動詞を以下の順に分類する。

1. 活用形(形式) — 「連用形」または「連用形+て」で分類
2. 相状態 — 「状態相」または「動作相」で分類
3. 種類 — 「継続動詞」または「瞬間動詞」で分類
4. 意志性 — 「意志動詞」または「無意志動詞」で分類
5. 動詞の持つ意味 — 「行為」、「動作」、「位置/所有権の移動」等で分類

Structure of Compound Verbs and their Translation Rules

Kenji MIYAMOTO, Tsuyoshi YASUI, Satoru IKEHARA, Jinichi MURAKAMI

Department of Information Knowledge Engineering, Faculty of Engineering, Tottori University

